本文章已註冊DOI數位物件識別碼

airiti Library

# 女流日記文学の源流と本質

doi:10.29714/TKJJ.199803.0010

淡江日本論叢, (7), 1998

作者/Author： 黃淑靜

頁數/Page： 190-217

出版日期/Publication Date：1998/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199803.0010

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

# 女流日記文学の源流と本質

淡江大学副教授
黄淑静

## はじめに

大学三年の時、中世文学の授業で「徒然草」の全編に漂う「無常観」に私は強く心を引かれた。その後ずっとこの事が私の脳裏にこびりついていたので、日本留学前の研究計画が目前に広げられた時、私は迷わず「徒然草の中心思想」を研究主題にしたのだった。

台湾に帰って来て教壇に立ってから、「徒然草」と随筆文学の名作としての「枕草子」の研究を続ける事を恩師に勧められて、それからの私は平安時代の「優雅」、「高貴」、「華麗」と形容しても過言ではない貴族文学の世界に入り込んだのである。

「枕草子」に関する書物や資料を読んでいくうちに、「紫式部日記」の存在を強く感じた。すなわち、「紫式部日記」はいつも影のように「枕草子」の後を歩んでいる、或は、「枕草子」が「紫式部日記」の後を歩んでいるように感じた。その関係は両者が互いに表裏一体であると言いきれるほどだと思った。

先賢が書き記した資料を拝読するうちに、「枕草子」の作者である清少納言と「紫式部日記」の作者である紫式部の深層心理や精神構造、或は作品の内容、形態などに関する素晴らしい論文が少なくない事に気付いた。清少納言と紫式部は同じ時代に生まれ、同じ宮仕えの女房の身分、それに漢文学の教養が高く、機知に富んでいる女性であり、日本文学史上、揺るぎない高い地位にそびえ立つ存在である。

紫式部と清少納言の「をかし」と「もののあはれ」の思想を取り上げて比較し、さらにそこから研究の成果を得ようとする先賢諸氏の研究動機は言うまでもない事である。

それゆえに、「枕草子」を研究している最中に、次の研究テーマは「紫式部日記」にする事を心に決めていた。しかし、広い意味で言葉を換えてみると、私の頭の中に張られたクモの巣のような欲求は「平安時代の女流日記の研究」、と言ったほうが適切かもしれない。なぜなら、「紫式部日記」を考える時、見逃す事ができないのは、同じ平安時代の「蜻蛉日記」、「和泉式部日記」、「更級日記」の存在である。

感傷的になりがちな私は、同じ女性の立場から、千年前の宮廷に生きる彼女たちと一緒になってはしゃいだり、楽しんだり、嘆息したり、涙ぐんだりする事ができる。そして、読書の最大の楽しみを得ると同時に、一つの結論を比較的簡単に見出したのである。

たとえ千年の歳月が過ぎ去ったとしても、それぞれの時代に生きる女性の心理の原点は全く変わらないという結論である。不思議なことに、私は周囲の友人たちの中に、紫式部や和泉式部や道綱母の影をいつも見ている。

平安時代の文学は、鎌倉室町時代の文学を武士文学と称し、江戸時代の文学を平民文学と称するのに対して、まぎれもなく貴族文学として広く知られている。すなわち、平安時代の文学は宮廷生活や貴族生活の中から生まれたものである。

airiti

山紫水明、優美の特質を有する京都の風土は平安文学の形成に大きな影響を与えた。

京都に都が遷されてから、京都は優美な風土の中に都としてますます完成の度を高め、洗練されていくとともに、藤原氏はますます勢力を強めていった。

そもそも貴族は、その生活環境や社会的地位の上では庶民に比べて高い地位にあり、それだけ高貴性と洗練性を備えている。貴族は宮廷と密接な関係にある事が多いが、平安時代においては、藤原貴族はその女を皇后、中宮もしくは女衛として天皇に侍せしめ、その腹に生れた皇子が帝位に即く事によって強大な権威を得、政治的にも権力を得た。

このように皇室と関係を深めることにより、平安貴族は日々優雅な生活を過ごしていたのである。宮中の儀式において奉仕している男性の束帯姿、女性の十二単衣のからぎぬ姿は高貴であり、典雅である。さらには、貴族たちや女房たちが夜の更けるのを忘れて、機知にあふれた会話を交わし、和歌でやりとりをする。このような貴族の持つ優雅な生活様式が平安文学の特質を形成した原点である。

平安文学はこのような貴族の文学であり、その作者の多くは宮廷に仕える女房たちである事が女房文学と一方で言われる所以である。

貴族の文学である事は前述したように、自然に高貴で上品な点を備えるばかりでなく、典雅な美も注目されるところである。

平安文学の特性を考察する時、作者たちの文学に対する自覚から生じた美意識がやがては美的理念に昇華していったと考えられる。これを日本の美論史の視点から考えると、これらの作品を生んだ平安時代は極めて意義の大きい時代と言えるのである。

私は平安時代の宮中の人々や事物に関してこの上もない魅力を感じている。生来、感傷に浸りがちな性格のせいだろうか。現代人がイギリスの皇室や日本皇室の成員の神秘的な一面に、好奇心をあらわにしてテレビから一刻も目を離さないように、庶民の私は今、書物や資料を通して道綱母や紫式部らの心の中に静かに入り込もうとしている。

彼女たちの深層心理をしっかりキャッチしていくうちに、私の研究テーマも絶える事なく自然に湧いてくるだろう。

これは、私の平安時代女流日記の心に関する研究の第一歩である。

airiti

## １．日記

「日記」と聞くと、我々現代人が思い浮かべるのは一日の生活の記録であるが、「国史大辞典」をひもといてみると、「日記」と称するものを大きく四つに分類している。それは、（１）事件の勘問調書の類、（２）報告書、注進状の類、（３）特定の行事や行動について日次記とは無関係に独立して記録するもの、（４）いわゆる日記文学、例えば、「土佐日記」などの紀行文、「かげろう日記」や「紫式部日記」などの回想記、さらには歌日記などと称される文学作品、などの四種類である。

日記の遺存例は平安時代のものが多いが、古くは公的な日記として「内記日記」、「外記日記」、「殿上日記」などが存在している。また、私的な日記としては宸記や公卿の日記がある。「内記日記」は奈良時代から令制に基づいて、中務省の内記が職掌として天皇の動静を記録したもので、公的な日記の中でもっとも早くから行なわれていたとされているものである。「外記日記」は大政官の書記である外記が職務として記録する日記であり、「殿上日記」は清涼殿の殿上の間に仕侯する当番の蔵人の職務日記で、いずれも漢文で書かれた記録である。「殿上日記」に関しては「侍中群要」巻四の日記の項に、「凡当日々記、無大小詳注記不可遺脱」、「当日之事、不漏巨細可記也」などとあり、毎日遺漏なく詳細に記すように求められている。また、当番の蔵人が、殿上の出来事を一定の書式に従って忠実に記録すべきものとなっている。したがって、これらの公的な日記の表現には執筆者個人の意見や感情の入り込む余地が無かった。

これらの公的な日記とは別に、私的な日記である天皇摂関以外廷臣による宸記や公卿日記の表現には記主それぞれの特色が見られる。

宸記は天皇の記録であるが、平安時代のものとしては宇多、醍醐、村上、一条の諸天皇の日記が伝えられている。最初の「宇多天皇御記」には、有名な阿衡の紛議事件が記載されている。仁和三年の宇多天皇即位の際に、藤原基経を関白に任じた詔書に「宜シク阿衡ノ任ヲ以テ卿ノ任トナスベシ」（宜以阿衡之任為汝之任者）と記した為に、基経は阿衡とは閑職の意味であるとして政務を顧みず、左大臣源融が天皇に詔書の撤回を強く要求し、半年の後に、天皇が譲歩して撤回に至ったという事件である。

公卿日記は故実先例を重視した上流貴族が備忘、或は子孫の為に日々の記録を残したものである。道長の「御堂関白記」、実資の「小右記」など著名な公卿日記の内容は、朝廷における儀式や行事の比重が大きく、記主の立場や思想による政界の動向や社会事情に言及したり感想や批判などの比重は少ないが、記主の個性によるそれぞれの日記の特徴は、やはり見受けられるのである。

公卿日記の原態は具注暦に書き込んだものである。

airiti

しかし、具注暦に記入するという形式、基準があるとはいえ、各日記は記録される事実の経緯、軽重の度合いなどに顕著な違いが見られる。例えば、藤原道長が女の威子立后の当日に「この世をば・・・」の歌を詠み、我が極上の幸せを謳歌したという話は有名であるが、「小右記」に詳しく記述されているのに、「御堂関白記」には執筆者が本人であるにもかかわらず記載されていない。この事から考察すると、行なわれた事実ですら記録されたり、記録されなかったりで、記録された場合でもその軽重の度合いに微妙な差があるという事がわかる。これによってどの日記が正確ときめつける事はできない。記録される事実は「執筆者の心理から見た事実」である。それは執筆者の意識の如何と関わりなく存在する原理であると考えたい（注１）。言葉を換えれば、記録される事実は執筆者の立場や視角のありようで左右されるとも言えよう。

そもそも日記は、宮廷、官庁などの日々の出来事を記録し、後の参考に資するために保存された実用的な作物であった。それが廷臣その他の私的な日録にもなったので、個人的な体験に基づく日常生活上の観察を記したり感情移入をする事も可能になった。しかし、漢文で書かれている間は、まだ、繊細な描写や文芸性を持つまでには至らなかった。

平安時代の仮名日記は旅日記である「土佐日記」が最初で、その後、女性の書いた日記として「蜻蛉日記」が登場する。

「土佐日記」は紀貫之という男性の官吏が「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり・・・」と書きだしているが、当時の日記は男性の書くもので、しかも漢文で書かれていたと思われる。

「土佐日記」以前の漢文で書かれた男性の日記について「群書類従」や「新群書類従」で調べて見ると、日記や紀行の部に収めてあるのは、日記では「和泉式部日記」「紫式部日記」、紀行では「土佐日記」以降であり、紀貫之以前の仮名文日記は無いと記されている。この事から、漢文日記的な作品は紀貫之以前にはあったと推察する事も可能である。

現在、最古の仮名日記は醍醐天皇の皇后、藤原穏子の「大后御記」と言われている。このほか、女性による仮名日記としては、歌合の仮名日記も看過できない。とりわけ、「天徳内裏歌合」の仮名日記は漢文の「御記」や「殿上日記」とともに記録されており、その公的な性格を窺い知ることができる。

しかし、「日うち傾いてものの色見ゆるほどにていとめでたし」、「装束赤色に桜襲なるべし。されど見えねばかひなし」などの記主の感情移入なども見られる。このように記録の範疇を逸脱して女性ならではの描写の視角を広げていく様相は、男性の漢文日記より振幅の度合いが大きく、これは公的な立場や身分上の制約が男性ほど厳しくない女性の筆から生れる特性と考えられる。

airiti

柔軟で自由な表現が可能な仮名の効用を考えた紀貫之は、この仮名日記の体を借りて、自己の芸術的な創作力を発揮しようとしたのであろう。

（注１）日記と日記文学　解釈と鑑賞　６２巻５号（秋山虔）

## ２．女房日記

「女房日記」という語を見ると、後宮に仕える女房たちが書いた日記という意に受け取れるのは言うまでもない。

しかし、実際には「蜻蛉日記」「紫式部日記」「和泉式部日記」のような女房たちが書いた作品を女房日記と称する場合もあるし、女流日記と称する場合もある。この名称の差異は、勝手に自分の好みで選び出した名称を使っている場合が殆どである。

それでは、女房日記と女流日記の相違点はどこにあるのであろうか。

結論付けるとすれば、「女房日記は女流日記の前身である」と言えるし、これは否定できない事実である。言葉を換えれば、女流日記文学の本質を探究するなら、まず女房日記の本質を探究する事から始めなければならないという事である。

歌合日記は、天皇や上皇を主催者とする歌合行事を記し残す公的な記録である。それは言うまでもなく私的な行為ではなく、後宮を含めた宮廷の栄華の記録である。性格上から言うと、盛儀に参加した全員が共有する栄華の記録である。すなわち、後宮はそれぞれ一つの共同体であり、それを構成する人たちは、互いにその場の栄華をエンジョイするような関係にある。要約すれば、歌合日記は天皇を中心にした後宮の繁栄の公式記録である。

「太后御記」は「皇太后藤原穏子御賀記」のような形で伝存されたと思われる。それは穏子後宮を構成する全員の共有性を持っていたが、女性中心の遊宴という性質面から見ると、歌合日記の公式記録と違って私的な性質を備える近侍の女房が記す家記である。

したがって、歌合日記と「太后御記」の共通点は後宮社会の全員が共有する性質を持っていた事である。そしてまた、後宮をバックグラウンドとした晴やかな舞台の記録という共通点もある。

しかし、両者は延喜、延長年間に端を発した同時進行の作業と言えるだけで、影響を及ぼし合った点は見られない。

「太后御記」は次第に後宮とその父兄たる摂関はもっと強く結び付き、穏子後宮から産出され、一方歌合日記は多くの後宮が増えてきたとの点から取って考えると、歌合日記と「太后御記」のその同時的形成は、いわゆる前期摂関制から後期摂関制への胎動の中で、

airiti

次第に拡充されたのであろう後宮と、それに伴い質的向上をもたらされた後宮近侍の女房団体の形成が、仮名散文の発達の潮流と接したところに由来するといえようかと思う（注1）。

後宮のめでたい行事を慶祝事として記録した「太后御記」の特徴と、その反対に事実の記録ないし盛儀の盛況ぶりとその場に醸し出された雰囲気を表現しようとする歌合日記の特色を比較しながら考えると、女房日記の性格がくっきりと浮かび上がるのである。

前述したように、女房日記の基本的な姿は、主人と主家の繁栄にかかわる祝事、賀儀の盛大な情況や醸し出される雰囲気などの記録を通して、主人と主家の繁栄を賛美するものである。

だが、女房日記をもっと深く理解するためには、筆を振るった女房たちの心理を解剖し分析しなければならない。この心理の解明こそが、女房日記と後に論ずる女流日記の相違を語る重要なポイントとなろう。

さて、女房日記はこうして主人と主家の繁栄を賛美するという性格を持っていたから、主家の盛儀や祝事が行なわれる時には、女房たちは何事も見逃さないように目を大きく見開いてその場に臨んだであろう心情が想像されるのである。それだからこそ盛儀の盛大な場面、賑やかな繁栄のシーンをまるでテレビカメラのように自分の目に収めておき、後に出来事のすべてを洩らす事なく記していたと思われる。

これは主人や主家の希望や期待に応えるというよりも、女房たちがその職務を意識していたからにほかならない。女房たちにとって、この仕事は生き甲斐であるといっても過言ではなかった。しかし、主家から与えられた職務であろうが生き甲斐であろうが、単なる主人の一種の家記であるがゆえに、記録という枠内に究極の賛美の言葉をちりばめて記した記録に過ぎないとも言えるのである。それは決して強要されたわけではなく、完璧に女房たち自身の意欲でその筆を振るったのである。だが、それは客観的な描写に終始し、女房それぞれの個性的な心情の吐露などは見受けられず、女房自身の感情や批判など何一つ探りだしようもない。

今まで述べてきた事をまとめれば、主人と主家の繁栄に寄せる賛嘆の言葉も作者である女房の個人的な心情写照ではありえない。言い換えれば、女房日記は単なる文筆高い後宮の一女房の筆を通して、後宮の構成員から主家に対する賛嘆や欽慕の共同の念を文章化した一種の記録と言えよう。

ここまで述べてくると、無視出来ない一つの問題が浮かび上がってくる。それは、女房日記の形成の経緯を推考するなら、その背景となる父兄摂関外戚政策の拡大による後宮女房社会の発展の経過と深く関わっているのを見逃さない事である。

airiti

父兄摂関の強大な権力は後宮の繁栄を導き出したが、後宮の繁栄につれて父兄摂関の権力もさらに高まった。両者の関係は切っても切れない「唇歯相依」のような存在である。したがって、後宮の気風の形成要件の一つである女房の担う役割も、実質的に重要な位置を占めるのである。

仮名文字は、九世紀半ば頃には貴族社会で使用されていた事が一般説となっている。

仮名文字は当初から和歌と密接にかかわるとともに、漢字漢文の公の場を持たない女性によって洗練され、普及発達した。仮名文が貴族社会に浸透して発達するにしたがい、男女間の和歌の贈答や消息の伝達に大きな役割を果し、和歌文学も盛んになった。

藤原良房、基経の摂関体制が整うにつれて、律令体制の後宮職員の制度も大きく変革して内侍所は拡充し、他の十一司も変貌していく中で、後宮女房の数も増加していく。

十世紀後半の仮名文学が輝かしい一ページを繰り広げた原因は、仮名の弘通普及と和歌や歌合の盛行以外に、後宮女房の増加も無視できない。後宮女房の数が増えると、当然その中に優れた才能を持った女房が入っている可能性が大きいのである。

それゆえに、前述したように、父兄摂関体制と後宮女房社会は互いに運命共同体のような存在で発展し、女房日記はスムーズに、大きく展開し、開花し、やがては日本文学史上に女房日記を根底とする女流日記文学の豪華絢爛たる一時代を築くのである。

江戸時代、安藤為章は紫式部論を書いた。それによると、日本文学史上揺るぎない地位にある古典作品の偉大な作者として紫式部が注目される原因は、「七事共具」と説いている（注２）。それは以下のとおりである。

一、学問の家に生れた事。

二、生来、聡明であった事。

三、和漢の教養を積み、音楽などにも才能があった事。

四、最上流の貴族社会に出入りし、公事に見識を持っていた事。

五、時代の中で「中葉にして文質をかねたる世」に生れ合わせた事。

六、諸国の地理に明るかった事。

七、女性であり、しかも「中の品」に生れた事。

これは当時としては立派な紫式部論である。

安藤氏も特にその「五の項」で、時代が摂関政治体制の最盛期にあたり、中の関白道隆や御堂関白道長の全力をあげた後宮の育成庇護の時期であった事を指摘している。

「七事共具」は紫式部個人に限らず、当時の女房執筆者にもそのまま当てはまる事である。女房日記文学の花盛りは、世界の文学史上の奇跡とまで言われているが、それにはそれだけの時代的、社会的条件が具備されている事を計算に入れなくてはならない。

airiti

（注１）女房日記の論理と構造　宮崎荘平（笠間叢書）
（注２）紫女七論　安藤為章

## ３．女房日記から女流日記へ

女房日記の形成や性格を掘り下げながら考察してきたが、別の日記作品と言われる女流日記とのかかわりはどうだったのだろうか。これから女房日記から女流日記へのプロセスを述べよう。

女流日記と言えば、まず「土佐日記」、「蜻蛉日記」、「和泉式部日記」、「更級日記」、「讃岐典侍日記」が連想される。これらの日記作品の内面性を考察しながら、女流日記にたどり着いた成り立ちの具体的な経過を浮き彫りにしたいと思う。

まず、「土佐日記」から入りたい。

「男もすなるといふものを、女もしてみむとて、するなり」。

これは「土佐日記」の冒頭にある有名な言葉であるが、男性が女手に仮託して書く事を示している。

「もして」は「もしして」の誤りであり、仮名文で書く事を意味しているという論がある（注１）が、それはさておき「土佐日記」は女に立場を置きかえる事により、官人の立場から開放されて、個人の内的世界を記す事が可能になり、独自の作品形成をとげるに至ったのである。

いわば、「土佐日記」は文から見ると、女性の日記は始めての試みである事を提示して形成したのだと考えられる。

「土佐日記」は承平五年後半頃から翌六年には成立をみたと考えると、ほぼ女房日記を導き出した家記の性質も備える「太后御記」とは同時に並行するものである事になる。家記の性質を帯びるからこそ、すぐに世に流布するとは考えられないから、「土佐日記」と女房日記は交渉関係を持たなかったと言う事となる。

一方、前述したように、歌合日記は公儀たる歌合行事を記し残し、その後宮の繁栄を直接描いたものであるが、ただちに女房日記であるわけではなく、当時の紀貫之にとって、また日記とは意識していなかったであろう。

歌合日記の「土佐日記」を書く貫之への影響は、貫之自身がその発達に強力に参画してきた仮名散文の成長の姿であったのではなかったか。

それに、「土佐日記」が旅中の五十五日間、一日も欠かさぬ日次の記として形成されている事から考えると、「男もすなる日記」と貫之が意識した男性の日記は、公的或は私的

airiti

に記される日次の記としての漢文日記の性質を持っていた事は確かだと思う。

まとめて言えば、「土佐日記」は始めて仮名散文を駆使し、個人の心情に即し、喜怒哀楽を表現する事に成功している。そして、漢文記録にはないこまやかさを獲得したのである。

「太后御記」や歌合日記は女流日記文学の先駆としての意義は認められるが、あくまでも盛儀の行事の記録であって、後に登場する女流日記とは本質的に異なるといってよい。

これら仮名日記の存在は、「土佐日記」が仮名で執筆されるための前提の一つと考えられるが、「土佐日記」においては儀式の記録、主人や主家の繁栄の記録などとは異質の個人の感慨、自己反照、社会風刺によって、女房日記の狭小な枠を離脱して文学的営為を結晶させた。したがって、「土佐日記」に女房日記の投影を見る事はないと断言できる。

しかし、紀貫之の女の文字による日記の表現という大胆な試みは、仮名文学全盛時代を窺わせ、女の書き手が台頭する時代に入る息吹を感じるのである。

「蜻蛉日記」の作者である道綱母は、女手に仮託して私的な感懐を吐露する紀貫之とは違って完璧に一人の女であり、しかも女房ではなかった事は看過できない。

「蜻蛉日記」の成立期はまだ定説がないが、天暦、安和、天禄にまたがる二十一年間の記事から成り立っている。その頃、「太后御記」は既に、世の中にある程度知られていたはずであり、歌合日記も歌合行事の盛行によって知られていたはずである。

道綱母は当然それを目にしていたと思われる。

和歌の教養、物語の享受、その家系、素養など、王朝女流作家たりうるいくつもの条件を具備した一人の女性、道綱母が兼家という極めて個性的な男性と巡り合ったために、過酷な体験を味わい、ひたすら自分を具象化しようという心理の変化が生じた事は想像に難くない。「蜻蛉日記」にある道綱母の和歌の八割ほどが贈答歌である。

彼女は優れた歌人である。それでも和歌のみで披瀝できない心の深層を、日記の中に思いきり投入したのである。結局、日記は彼女にとっては心のはけ口だった。したがって、兼家との生活から受けた心の軌跡を赤裸々に告白し、執拗なほど自己の内面に目をむけて書く事は、主家の繁栄を記した女房日記の性格とは明らかに異なるのである。

道綱母に女房日記や歌合日記が影響したものは、その性格や枠ではなく、仮名散文の発達によってもたらされた女性の意欲だったのである。

したがって、女房日記や歌合日記は、物語や私家集などとともに道綱母に働きかけ、自己表現の可能性を促し、作品の形成を支えたと言える。

古代後期の女性の地位の低さ、家庭内での立場の弱さ、或は男性本位の結婚形態などについて、道綱母が女性としての主張も発言も許されない現実に敢然と抗して、自分の身辺

airiti

や苦悩する心を記す点を考察すると、それは「土佐日記」と全く異なる王朝女流日記の誕生と位置付けられ、さらには多くの女流日記を呼び起こす原点となったと言えよう。

次に「和泉式部日記」であるが、「和泉式部日記」は「はかなし」、「つれづれ」といった寂寥感、孤独感が全編を流れる基調となっている。その孤独感は和泉式部の生の根源的なものである。宮との恋愛の最中にあっても、心の底にひそむ孤独感はどうにもならない。こうした寂寥感、孤独感は、和泉式部に限らず、道綱母や紫式部のそれと一致している。女性たちは古今東西を問わず、殆ど自分だけの心の深層にひそむ孤独感に心情を左右された体験があるだろうが、「和泉式部日記」では、女の孤独な心に映る宮もまた孤独であり、孤独であるがゆえに互いに求め合い、互いの孤独感を確かめ合う。

日記の中のいろんな場面では「二人だけの世界」と「一人だけの世界」が共存し、表裏一体となっているのである。日記は女の意識の流れに沿って進行し、女にとっての理想像である宮を作り上げる。このように自己に執着する文学的営為は、二人だけの愛の世界を構築し、完全に女房日記の流れから離れた一種の私的な日記になったと言うべきだろう。

一方、「紫式部日記」と女房日記とのかかわりを述べてみようと思う。

「紫式部日記」は寛弘五年秋、主人中宮彰子の出産を間近にした道長の土御門邸内の秋の風情から始まり、道長の威風、盛んな加持祈祷、敦成親王（後一条天皇）誕生の喜び、その前後の彰子の母倫子、出入りする公卿、殿上人など奉仕する人々のまめまめしい動きや祝儀にかかわる諸行事の盛況ぶりを描き出し、もって主人中宮と主家の繁栄の情況を記していく日記は、女房日記そのものである。

親皇誕生という慶祝事に限定し、それに伴う盛大な祝儀の雰囲気を賛嘆的に描き、中宮と道長の賛美を中心として主家の栄華と繁栄を頌賀する、この特徴は女房日記の典型というべきである。

前述したように、出産直前から筆を起こし、親王誕生から御湯殿の儀、産養の祝儀、行幸、五十日の儀、中宮の還御、五節の儀式、戴餅の儀と連続する祝賀の行事記録は、いずれも記録を主軸といているものの、単なる記録にとどまらず、重点は祝儀の盛大さとその場の雰囲気の現出におかれている点も見逃せない。これは、歌合日記の性格と一致している。特に、その場の華麗なしつらい、豪華な調度類、人々のあざやかな服装、祝儀の盛大さ、活気あふれる雰囲気、数々の祝品といった華やかな主家に対する謳歌は、歌合日記と酷似しているのである。

しかし、紫式部の女房日記が歌合日記に依拠しているのではなく、歌合日記が女房日記の性格を備えており、女房日記の系譜にこの日記が位置を占めている事と考えたい。

だが、この日記は歌合日記の描写レベルにとどまるものではない。

airiti

歌合日記にわずかばかり見られた賛嘆の念の表現が、ここではすべての情況描写を覆う基調となっているところは、歌合日記と違う事をよく示している。

一方、日記の記録的な部分のところどころに「くはしく見はべらず」、「そなたのことは見はべらじ」など、盛儀のすべてを叙述できなかった事の断り書きが見られる。このような事を書き記す紫式部の意図は、行事の様子を可能な限り書きとめようとしていたからにほかならない。

この筆致は、例えば「天徳内裏歌合」の仮名日記に、「装束赤色に桜襲なるべし。されど見えねばかひなし」などと記されているのに相通ずるもので、行事の様子を自己の視点から記録していく歌合日記と同様のものである。

周知のように、この日記には中宮の出産にまつわる行事やその前後の盛儀の動静を精写した記録部分と人物批評や回想感慨などを述べた随想的部分が併存している。

特に、道長について嫌がらず多く記し、しかも精細な描写は、道長の人間像を浮き彫りにするほどである。例えば、中宮の出産直前に大声で人々に指図し、自らも率先して念仏を唱える道長、安産を見届けるとその喜びを一人で噛みしめるように庭に出て、遣り水の手入れをさせる道長の安堵の様子、初孫に尿をかけられながら相好をくずして慈しむ道長など。そして産後の崇高なまでに美しい中宮の様子などを活写して、まことに興味深い。

主家や主人を絶賛するところをとり上げれば、きりがないほど多い。私はこれらを次の研究テーマにするつもりなので、ここではこれだけにとどめたい。

先に述べたように、紫式部がひたすら主家への賛美をしながらも、随所に見られる紫式部特有の内省的な洞察は華麗な盛儀と対照をなして、外界とは反比例的に深まっていく。

例えば、行幸をまじかに控えて、土御門邸は美しく磨き立てられ、紫式部はその華美の中に身を置きながらも、心の底に澱んでいる憂愁の念から逃れられない自分を強く意識して煩悶する。

道綱母によって開拓された激烈とも言うべき自己告白の方法は、ここにはない。

しかし、華麗な後宮の世界を「あらぬ世」と意識し、そこに適合できない「私」に執着し、周囲の視点から「私」を冷静に凝視し続けていると言えよう。とりわけ、当代の三才女を論評するのだが、その果てに筆は自分の内心の世界に向けて、深い内省、鋭い批評を加えながら孤独の淵に沈んでいく。その自己凝視の恐ろしいまでの厳しさは、自虐とも思えるほどの過酷さで、荒涼とした境地に自分を追い込んでいく。そして、俗世から逸脱できずに苦悩し続ける人間の宿命的な存在を見出して苦しむのである。

さらに言えば、自分の幸せよりも他人の不幸や社会の矛盾を鋭く感受し、それを吸収回帰する事によって自分の幸せを打ち消し、陰の部分を助長するような思いが紫式部の筆下

airiti

でもたらされているのである。つまり、外界の華麗と内面の憂愁との相克による深化が紫式部の精神の基調をなしているのである。

紫式部が早くから持っていたらしい宮仕え嫌悪感や憂鬱な気分は、生来の内面的な性格も加わり、宮仕え生活の日常の中でさらに醸成されていく。その憂き身の自覚と体感は日記を記す、すなわち心の世界を形成する営みを通じて追及され、確かなものになっていくのである。

これまで述べてきたように、この日記は行事や盛儀を精写するのだが、主家の繁栄への賛美の言葉の奥には、作者自身の憂愁の念や厳しい人間探究の精神が潜んでいる。宮廷女房としての公的な記述と人間としての筆の二つの性格が見られるのである。

言葉を換えれば、女房日記たる公的な記録、もう一面は女房日記を根底とする私的な日記作品である。この相対する二面性がこの日記の最大の特色と言えよう。

次に「枕草子」に入ろう。

紫式部と同時代、同じ背景、同じ風土に生れ育った清少納言の作品「枕草子」は作品の雑纂形態を考えれば女流日記の枠に入れられないが、女房日記を意識して筆を振るったのではないかと思う。

この作品では清少納言が中宮定子を賛美するのだが、清少納言と中宮定子との間には主従の関係を超越して清少納言の存在を支える中宮定子の様子が見られる。

よく言われる作者の自賛談とされる２７８段「香爐峯の雪」では、「少納言よ、香爐峯の雪、いかならむ」と中宮が謎をかけるが、これ自体中宮の演出で、白詩の再現という意図があった。清少納言はそういう中宮の意図のままに演技したにすぎない。

同僚の女房たちの「なほこの宮の人にはさるべきなんめり」という賛辞を記したのも、中宮あっての清少納言という関係を示したものである。

高貴にして明るく、しかも才気に富む中宮定子のもとに漢詩文の修養を積んだ清少納言が帰依して、後宮サロンは一つのあざやかな舞台となった。優雅にして知性あふれる雰囲気に包まれた舞台の上で、二人は思う存分活躍したのである。だからこそ、清少納言は中宮と特に関係の深い自分の立場を、やや気取って強調したと思われる。

記す事の憚りの中にも光栄の念を表出している事からも窺えるように、自分自身とのかかわりの中で描く中宮への賛美は、この光栄の念に裏打ちされているのである。

一方、積善寺供養に関する段は、じっくり読めば実に興味深い一段と言ってもよい。

この一段は儀式ではないが、清少納言は多くの筆を費やし、その場の情景を詳細に活写したが、「しばし待ちて、舞などする、日ぐらし見るに、目もたゆく苦しう・・・」と書いたように、あんなに浮き浮きする人々の様子や豪華絢爛たる情況を漏らさず披瀝したの

に、法事の中を何故「目もたゆく苦しう」と一筆で省略したのだろう。

このように見てくると、清少納言の描写の意図は中宮のめでたさとその賛美にあり、主家の繁栄を顕示する盛事はそれを描写するための一環境に過ぎないと言ってもよかろう。

「こはいづくの仏の御国などに来にけるにかあらむと」、「なべてただにこの世とおぼえず」。素晴らしい立派な環境を通して、中宮への至上の賛美を表現するという清少納言の本当の狙いがこの文面から窺えるのである。したがって、祝事などの特定の盛儀を通して主家の繁栄を描く方向をとらなかった事が、「枕草子」の特質だと思う。

石田譲二氏は「枕草子」について、「この作品の性質については、中に含まれる日記的回想章段、即ち作者の仕えた中宮定子の後宮記録を中心にして考えるのが筋道であろう。簡単に言えばそれは女房日記である」、「枕草子の日記的回想章段は、作者自身の見聞や言行を中心に、それを記録したものではなく、たとえばよく言われる自賛談の如き、作者自身の手柄話を書いたと思われる話も、虚心に読めばそれが中宮定子を中心とする、定子の後宮のものの記録を意図したものである事がわかる。その点で、紫式部日記が、建前として彰子の後宮における、その御産や行幸や、五十日の行事を記録しているのと、性質は全く同じと考えていい。女房日記とはそういうものであった」と説いている（注２）。

つまり、中宮賛美を中心とする日記的回想章段に限定すれば、それが中宮賛美を主軸とする女房日記の枠内で書かれたものと見られる。

「枕草子」が女房日記である事は明らかである。

「枕草子」には道隆が病没して中関白家は没落の一途をたどる事になる後半の時期の暗さに関して、ほとんど何も語っていない事を考えると、清少納言の女房の本質をあくまでも守ろうとした心理上の束縛はどうだったのだろう。非常に興味深いところである。

また、主家の盛儀などに背を向け、平常の生活の中での中宮と自分の深い関わりをしっかり捕らえて、面倒がらずに繰り返し環境の素晴らしさを描写する事によって、中宮への究極の賛美を現出していく点を考えると、「枕草子」は女房日記の枠をはみ出した個性あふれる独自の女房日記への発展を遂げたものと言える。これはまるで女房日記の原点を逸脱した独自性に富む生き生きとした立派な記録であり、日本文学史の流れにおいても計り知れない存在であると思う。

最後にまとめれば、前の章でも触れたが、女房日記の成長ないし発展の経緯は摂関外戚政策の進展に依存しあう関係にあった事を無視できない。

後宮の繁栄がその父兄である摂関の安泰を保証するという情況下で、かなり積極的に才能のある女房を集めていたと思われる。しかし、紫式部と清少納言は、その後宮内で才能に恵まれているから選択された女房ではない。

airiti

二人はそれぞれの主家から資質を認められて後宮に出仕した女性である。いわば、出仕当初から任務が方向付けられていたとさえ言える。主人と主家の信任厚いこうした女房が主家のために記録を書き残すことになると、自分の才能の限りを尽すのは当然であり、個性あふれる作品になるのもうなずけるところである。

「紫式部日記」と「枕草子」の根底には女房日記の影が投影され、またそれを根底として、別々の道をたどった事が顕著に見られる。すなわち、「枕草子」は雑纂形態なので女房日記の範疇に入れなかったが、「紫式部日記」は女房日記から女流日記文学への展開を果たした稀有の作品となるのである。

この作品は、女性が自己の内面を現出すべく産出された日記文学の流れと、主人と主家とを賞賛する女房日記の流れが合流する地点に成り立ったものと位置付けられよう。

つまり、女房日記の流れを汲んだ女流日記は「紫式部日記」だけなのである。

（注１）日記文学の本質　国文学解釈と鑑賞（学燈社、昭４４．５）
（注２）枕草子　解説（角川文庫）

## ４．女流日記から女流日記文学へ

女流日記文学とは女流の日記であり、今日一般に思い浮べられるものは、主として平安時代の仮名文で書かれたもので、その代表的な作品は「土佐日記」、「蜻蛉日記」、「和泉式部日記」、「紫式部日記」、「更級日記」の五大作品であろう。

秋山虔氏は「女流日記文学とは何か」という論説で女流日記文学を（以下「日記文学」と略称）と書いてあり、これを見ても傍証できるであろう。

これらを日記文学と言うのは、古くから題名に「日記」の語が付いていたのも確かである。ここでは、日記と日記文学の相違点がどこにあるのか述べたい。さらにはこの問題の方向に沿って日記文学の本質を見付けだしたいと思う。それは女流日記が女流日記文学になるためにはどんな特質を具備しなければならないかと言う事でもあろう。

日記文学という語が用いられたのは、久松潜一氏が大正十五年七月の国文学ラジオ講座の一部に「日記文学と女性」という題で話した時に出た語で、それが日本文学聯講第一期として昭和二年に刊行された。それが文献に現われた最初である。

「日記を書くといふことは文学を製作するといふ意識のもとに書かれたのではないと思ふ。（中略）。日記を記す心持から見ても、読者を予想せず批判を予想せず、従ってまたよく描かうとするよりは、より精確にあるがままに描くといふことが、その製作する動機

airiti

の中心を占めるものと思ふ。而もかくの如く文学を意識せずに描いて、而もそれが結果に於て文学として鑑賞に値するものこれを日記文学と申したいと思ふ」と久松氏は述べた。

池田亀鑑氏の「宮廷女流日記文学」が刊行されたのは昭和二年であるから、文献に現われた点では久松氏の方がやや古い。久松氏が大正六年垣内松氏の「日記随筆に現はれた日常生活」との講義を聴講したのであるために、自分が自照文学の名において日記の文学性を提唱したのは垣内氏に導かれてのことで、池田氏も垣内氏の聴講を聞かれたので、その前記書もその影響があろう（注１）と述べている。

しかしながら、「自照」なる語をもってする日記文学の性格づけがいかに無効であるか、今井卓爾氏によってその「意味の不分明」や「限界の不徹底」が論破批判されている（注２）。なお、久松氏によれば、女流日記が一層文学としての価値を認められるに至るのは、日本自然主義の隆盛、私小説の文学観に基づくものであったという。しかしながら、日記文学は日記を文学と見なす、そうした後世の見方によるものではないと思う。

一方、玉井幸助氏は、日記は事実を記録した文書であるが、「日記であって更に文学的なもの」すなわち「作者自身がある事実に対して、『あはれ』『うつくし』『おもしろ』等の感情を起こし、興奮を以てその経験を書き記したものが日記文学なのである」と説明している（注３）が、ここに言われる作者の感情、興奮の有無深浅は何をもって推し測ることができるだろうか。読者側の享受度から考えれば、久松氏の見解とほぼ一致するだろう。

また、木村正中氏は、日記文学が日記と本質的に異なる相違点はどこにあるのかをその著書の中で述べている。それは作者の感情が生々しく表出されているとか、精彩に富んだ場面描写がなされているとかいうような事からは、必ずしもその決定的な相違点とはなりえない。「偶然的な筆者の感慨の吐露や表現の躍動が、日記文学を形成造るのではなく、書き進められていく表現の根底にあって作品全体を統括するものが問題なのである」。

「歴史的な観点に立ってみた場合、日記文学が長い日記の伝統の上に成立した事は否定しがたい。しかしそれは、玉井幸助氏が総括的に意義づけられたような事実の現として連続しているものではない。日記文学の作者たちは、それぞれの歴史的、社会的背景のもとにおける経験的事実の中で、彼らがいかに受身な不安定な立場に置かれているかを痛感した。そのような立場から脱出し、彼ら自身の存在意義を積極的に確立する道はどこにあるのか。彼らがその不安定な歴史的位相から逃れられない以上、その道は書くことによって体験の内容をもう一度たどり、そこに現実から開放された新しい世界、自立な構造をもった新しい世界を創造するよりほかにないではないか。かくしてはじめて、事実を書くという日記の伝統を受け継ぎながら、しかも事実を乗り越えて、記録的日記とはまったく質を

異にする日記文学を生成せしめたのである。」（注４）

この木村氏の日記文学に対し、いっそう縦横両面を見て解析した精解は立派であり、私は賛成である。言い換えれば、日記は単なる記録に過ぎないが、そこに文学性が加われば日記文学となるわけである。

木村氏が「土佐日記の構造」では、「作者が場面の中に自己を解体する事によって感動を実体化」すると「同時に登場人物をも場面の中に解体し強靭な形象性を失っている」様相を明らかにしているが、それは日記の方法に依拠するかぎり必然的な事であった。

むしろ諸人物の形象性が十分であるかないかを問わず、紀貫之の内面をそこに仮託し転移するかれらが、事実記録性の装いのもとに、そこに登場せしめられている事の意義を重視しなければならない。紀貫之は日記の方法の主体的選択による日記の否定、すなわち虚構としての日記文学を創造したのである。

もちろん紀貫之の女装が必ずしも「土佐日記」の世界に貫徹しているものではなかったが、その事が日記の方法によりつつ日記から日記文学へと脱却させる基盤の確保であった事は疑いのない事実である。

「蜻蛉日記」の作者である道綱母は宮仕えもしないで、終始家庭にいた女性であり、しかも自意識の極めて高いと思われる受領階級の女でもあった。こうした環境の作者が、比較的無頓着無放縦な政治権力を持つ手腕家との組み合わせによる家庭生活を第二、或は第三夫人として営みながら、男を独占しようとするところに厳しい態度が生れてきたのである。一子道綱の母として生きながら、しかも現代とは異なる習慣の結婚生活をし、一家庭人としてさまざまな体験をしたのだから、おのずと読者にアピールする素材を取り上げる事になったものと思われる。

道綱母は約二十年の生活の主要な点をまんべんなく書いたのではなく、強調したいところを重点的に書いている。そして作者のそうした指向するものが、享受者に圧力をかけるにたる文字表現となっているために、享受者は往々にして作者のペースに巻き込まれるのである。享受者を巻き込むだけの筆力を持っており、作者の指向と素材と表現とが一致しているために、こうした結果をもたらす優れた作品になったのである。説得力のある感性あふれる作品として高く評価されるのも当然であろう。

日記文学の達成度という視点から見ると、「蜻蛉日記」は画期的作品と思われる。

木村氏が前記「日記文学の本質と創作心理」の論文において、「蜻蛉日記」の場合における阿部秋生氏、上村悦子氏、尹牟田経久氏らの論説をとりあげて、「『蜻蛉日記』の写実性の限界を明らかにし、その告白的実感を実人生の次元でなく作品構成の次元に求めていこうとする研究は、『蜻蛉日記』の素朴な感動を否定し、作者の人生苦をかえって作為

的なものにする印象を与えるかもしれないが、作者の人生体験の再編成、苦悩に満ちた内的世界の構築の中において、はじめて作者の人生苦が鋭く具象的に表現されたと見なければなるまい」、「『蜻蛉日記』は明確な主題や意図的な構成を持っている作品である。そのことの中にあるだけでなく、作者がみずからの体験を再現していく過程で、素材的事実を乗り越え、独自な世界を作っていかなければ、彼女の人生の真実を確保できなかった、まさにその作品形成の方途の中にあるといえよう」との結論から見ると、「蜻蛉日記」は日記文学的な特質を備えている事を研究者たちにも認められている事が明らかである。

日記から日記文学への軌跡において、「紫式部日記」は貴重な存在であると言ってもよかろう。

前述したように「紫式部日記」の記述の内容は、「敦成親王誕生慶祝記」と言ってもよいほど、約三分の二は敦成親王の誕生に関わる記録で、構成上極めてアンバランスになっている。親王誕生という慶祝事に限定し、それに伴う盛大な祝儀の雰囲気を賛嘆的に描いて、中宮と道長の賛美を中心として主家の栄華と繁栄を頌賀するような記録は、過去の人生を回想する他の女流とは明らかに質を異にするものであり、「太后御記」や歌合日記の源流からなる女房日記の流れを汲むものと位置付けられる。

前章でも述べたように、盛儀を詳細に記録しようとする観察の目が、それに奉仕する女房たちの容姿や衣装に及び、これに感想批評が加えられて、作品はやがて記録性から開放され、主観的な随想像を含むものに変貌していく。

しかしながら、研究者たちが変わらぬ関心を持っているのは、この日記が皇子誕生という主家の輝かしい賛歌でありながら、その底流の色調が重苦しく沈鬱な事であろう。

この外界の華麗と内面の憂愁の二面性が大きな特色と思われるが、それはとりもなおさず紫式部の精神構造に起因するものであろう。この日記が女房日記の流れを汲みながら、平板な記録にとどまらず、自己反省や告白の思惟を伴って内省的に深化した人間記録となっているところに、記録性を超越した日記文学としての達成を見たと言えるだろう。

一方、「和泉式部日記」が和泉式部本人の述作か否かはさておき、従来「和泉式部物語」とも称されているため、議論が集中する事になる。前にも述べたように、和泉式部の生の根源である孤独感、寂寥感は、道綱母や紫式部にも通うものである。

和泉式部は、凄絶とも言うべきみずからの情熱的な生き方をこの作品の中に描いた。

和泉式部の恋の相手はまず冷泉天皇の第三皇子で彼女とはほぼ同年令だった為尊親王だった。奔放な生き方と情熱的な和歌で知られる女流歌人、和泉式部と為尊親王の恋は、世間に取り沙汰されたが、不幸にも為尊親王が都で流行していた悪疫に感染し、二十六才の若さで病没した。夫の道真はそれを契機に彼女の下を去っていく。

airiti

為尊親王の死、夫との離別、世間の非難、父雅致からの勘当同然の扱いなどにより、すべてを失った和泉式部の傷心と孤独はいつまでも続かなかった。翌長保五年夏、彼女は今度は為尊親王の実弟敦道親王との苦しい恋に落ち、二人の関係は、その後およそ四年余り続く。

「和泉式部日記」はここから幕を開くのである。

この日記では、許されぬ恋の世界における二人の姿の描写にとどまらず、二人の複雑に揺れ動く心理の緊迫した情況が描かれている。こうした二人の間における微妙な感情の起伏、恋愛心理のあやによって事態は展開されていくが、その特色は全編で百四十七首に及ぶ贈答歌である。王朝女流日記の各作品に詠まれた和歌の頻度を見ると、この作品は実に一ページに約三首であり、最高である。詠み込まれた和歌は彼女の心に育まれた純粋な恋の世界を形象化しており、日記文学としてのこの作品の特質はまさに「和泉式部日記」と和歌との密接な関係にあると言える。この数多くの和歌は宮と彼女との間に交わされる贈答歌であり、一回ごとの応答で終るわけではなく、繰り返し繰り返し応酬される中に、二人の緊迫した心理の微妙な動きや起伏が読み取れ、それが優れた文学作品として読者を魅了してやまないのである。

日記はまた、最初の「故宮」への追憶から生れる自省と「つれづれ」をもてあます衝動との葛藤、「故宮」の登場がなくなる段階における「すきごとする人」と言われる和泉式部に対する世評に振り回される宮の誤解と不信感などが再三、現出する。

「言の葉ふかくなりにけるかな」、「白露のはかなくおくと見しほど」のかけあいは、二人の一体化を表わしているが、終りの和泉式部が宮邸入りを果たした展開のくだりを見ると、宮との関係に流動していく彼女を、冷めた目で凝視する和泉式部自身の存在を感じるのは、筆者一人ではないだろう。

それは、以下の文に顕著である。「なにの頼もしきことならねど、つれづれのなぐさめに思ひ立ちつるを」、「・・・など言ふほどに、例のつれづれなぐさめて過ぐすぞ、いとはかなきや」と述べる事から見ると、彼女にとって、二人がやっと一緒になれたにもかかわらず、将来は必ずしも明るいわけではなく、単なる「つれづれのなぐさみ」の意味しかない。

「喜びはつかの間のこと、はかなしはまた明るみの中、見ればちっぽけなかたまり」。

この妙に冷めた意識は、この作品の全編の底に流れるものであり、自分が生きる世の一切を「はかなき」とみつめている彼女の着眼点、そして思想を享受者ははっきりと感じ取り、文学作品としての筋の通ったテーマを感じ取るのである。

「和泉式部日記」は、和泉式部が恋のはかなさを知りつつ流れのままに流されて、波乱

airiti

万丈の人生を生きる一人の女として自分を描いた作品、そして情熱的な和歌の数々を宝石のようにちりばめてユニークな世界を創造した「女流日記文学」の傑作である事を認めざるをえない。

次に「更級日記」について述べよう。

この日記は菅原孝標女が晩年に記した回想記である。多感な少女時代を父の赴任先、上総で過ごしたが、当時の交通事情を考えても都は遥か彼方の夢の中だったと想像される。

その頃の彼女にとってのあこがれは華やかな都だった。十三才で都に戻った彼女の現実は貴族社会の華やかさとは程遠いものだった。特に、上総の生活で彼女に少なからぬ影響を与えたと思われる継母との別れ、結婚後も共に生活していた姉の出産時の死はこの多感な文学少女に大きな影響を与えた。その頃「源氏物語」を耽読し、「源氏物語」の世界に浸りきっていたのも、ただ単に物語が好きという事ではなく、あまりにも厳しい現実からの逃避であったと思われる。しかも現実の厳しさは、傷心の少女をさらにむち打つのである。その後、父の再度の東国への赴任による母との寂しい生活、父が戻った後の母の出家、短期間の出仕、晩婚とも言える結婚、源資通との三年にわたるひそやかな恋、やがては夫との死別など、決して華やかとは言えない波乱の体験が、この作品の日記文学としての糧となったのは言うまでもない。

「世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、よひゐなどに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとゆかしさまなれど・・・」の冒頭のくだりは、上総で父、継母、姉と過ごした頃の汚れを知らない少女期の憧憬を物語るにたる文であり、読者をこの作品に引きずり込む情景描写となっている。

文学少女だった彼女が嫁いだ夫橘俊通の和歌はこの作品の中には一首も見当たらない。

この事を考えると、物語好きな彼女にとって夫婦仲が不和ではなかったとしても、夫婦の共感が持てる幸せな結婚だったとは思えないが、夫に先立たれた事によってもたらされたいろいろな喪失感は、日記の形成に大きく関わったのである。結末部では、夫の死、弥陀来迎の夢の中でぴたりと筆を止めた。こうした終りなき終り方は女流日記の特性を示している。

日記に記されている事すべてが彼女にとっては一度だけの貴重な経験であり、それに真摯に対処している事も認められるが、真実の吐露にしては迫力が欠けるのはこの作品全体に漂う浪漫性のなせるわざであろう。しかし、この浪漫性こそが厳しい現実をオブラートに包み、この日記を文学作品まで昇華させた原因になったと考えられる。

ここまで述べてきた事からわかるように、女流日記の作者たちの経験的事実に立ち向か

airiti

う姿勢による記述は、それを超越する場の自立性を獲得する精神運動として、かたどられている。その人生経験の浄化克服であるという事情を物語っている行為、それこそ日記文学の創作と言えよう。

（注１）日記文学の本質　国文学解釈と鑑賞　久松潜一（学燈社、昭４４．５）
（注２）平安朝日記の研究　今井卓爾（啓文社）
（注３）日記文学概説　玉井幸助（目黒書店、昭和２０．６）
（注４）日記文学の本質と創作心理　講座日本文学の争点　木村正仲

## ５．女流日記文学の本質

### （１）女流日記文学の時代背景

日記文学の作者たち、藤原道綱母、紫式部、和泉式部、孝標女、讃岐典侍など作者名を見ると、氏名のままで伝承された者は一人もいない。子息、父、夫などに因んだ呼名が定着したところを見れば、女性の地位が著しく男性に依存しておかれていた当時の環境が推測される。それに彼女たちは、ほとんど固着した生活環境にあり、京外に出る事は稀であった。閉塞した屋内の生活から屋外へ、さらに郊外へと出る機会があれば、非常に有難い印象を持ったものである。しかもそれが遠距離であるなら、未見聞の世界に極めて感動した事であろう。日記の中に旅の記事が入り、紀行的な性格を持つのはこのためである。

未知の世界の印象深い初体験が紀行文となるわけで、女流日記にもこうしたものが組み込まれる事になる。

しかし、一般的には公的、あるいは社会的な生活の場を持たなかった彼女たちは、身辺の事を多く取材し、身辺の人との喜怒哀楽の感情の交流を描写した。

一方、女流日記文学の担い手が、中流貴族いわゆる受領層出身の女性である事に注目したい。

藤原道綱母は天暦八年（９４５）の秋、父藤原倫寧が陸奥守として任国に赴くのを嘆き悲しむ。

紫式部の父、藤原為時は長穂二年（９９６）淡路守に任ぜられたのを嘆いて一条天皇に愁訴し、道長の指図で越前守に改任された話は有名であり、最後は受領の官職であった。

和泉式部の父、大江雅致は冷泉天皇の皇后昌子内親王の太皇太后時代に大進として仕え、後に木工頭、越前守などを歴任した受領である。夫の道真もまた受領の家柄だった。

「和泉式部家集」によれば、和泉式部は夫に従って任地の和泉国に下向した事もあり、

airiti

二人の間には長女も生れたという。道真の和泉守在任の二年目から三年目の別居中に、和泉式部は為尊親王との恋に溺れるのである。

少し遅れて「更級日記」の作者である孝標女についても同様の家庭環境が見られる。

父の菅原孝標は寛仁元年（１０１７）に上総介を、長元五年（１０３２）に常陸介を勤めた後に、西川に隠棲した人である。彼の場合は介であるが、親王任国であるから事実上の受領である。彼はあまりにも凡庸な人物であったという。

孝標女の夫である橘俊通は下野守や信濃守を勤めた人である。

このように見てくると、女流日記文学の作者たちは受領の女であり、彼女たちの配偶者の多くもまた受領であった。言葉を換えると、せいぜい受領どまりの中流貴族出身の女性であったと言える。

女流日記文学の本質を探究するうちに、必ず一つの特色に気付くはずである。それは仮名で書かれている事である。一部に漢字の使用はあるにしても、それは漢文ではない。

仮名の発生と普及の時期が女性の文学に能力を発揮する時期とぶつかり、漢文の公の場を持たない女性によって、仮名そのものが洗練されて普及していくという時代背景を見逃せない。いわば、男性の公的な記録としての漢文日記と対照をなして女性の仮名日記が発展したのである。

この漢文日記と仮名日記の関係について川口久雄氏は以下のように述べている。

「漢文日記は最初は具注暦に書き入れるようなかたちもあるように、単なる事実を羅列するような性格があって無味乾燥で、歴史家が史実を考証する時に資料として使われるもののように考えられやすい。これに反して仮名日記は女性の生活体験を本能的な日常の言語形態で叙述する。精神の内的風景、感情の高まりや波動をさながらに描写していく場合も多いから、文芸作品として読まれるものが多い。こういう見方からすれば、漢文日記と仮名日記は全く性格を異にするものと考えられやすいが、はたしてそうであろうか」。

また、「権記」長保二年二月三日条の記録について「漢文日記でありながら優艶な仮名物語の一節さながらのおもむきである」、「『讃岐典侍日記』堀川天皇の崩御前後の記録が漢文日記より生々しく詳細な事実として記録しているし」、「蜻蛉日記」安和二年の条では「安和の変の源高明流謫事件を生々しく詳記している」と述べる事によって、女流の仮名日記は「歴史的事実の詳細を記録する事において漢文日記に譲らず、単なる優雅な女流文芸の仮名日記の枠を超えている」（注１）と従来の論説に反発した。

いわば、漢文日記と仮名日記とは大した差異はないとの川口氏の新説に対して、秋山虔氏が「いかにもある特定の記事を抜き書きして読み解こうとする限りでは合点されるのだが、しかしながら漢文日記における記事は根源的に、それが事実に対応するものであり、

そこでいかに心情的なものが加味されようともその記事は存在した出来事とこれを読む者とをつなぐ媒材に過ぎず、これに対して仮名日記＝女流日記文学における記事はそれが事実にもとづくものであっても、その事実はことばによって紡がれる文脈のなかに組み込まれて経験される事実にほかなるまい。従って、その記事が『史料』として扱われるのであったら、それはそのことばを紡ぐ主体のありようをも対象として含めるべきであろう。漢文日記と仮名日記の記事そのものを同一位相に並べてその粗細を云々するのであってはなるまい」（注２）と否定した。

筆者は秋山氏の説を支持したい。漢文日記にせよ仮名日記にせよ記録者や作者は人間であるから、筆を走らせているうちに人間としての感情がにじみ出るのは自然の成り行きである。強いて両者にたいした差異はないとする見方は牽強付会の説だと思う。

漢文日記は備忘録的な意味と子孫に書き残す家の記録という場合が多いので、記録する者の文学意識はほとんど見られない。

女性の仮名日記にも実用のために書かれたものが全くないとは言えないが、文学意識をもって書かれたという事が両者の最大の差異である。この作者の文学意識こそ日記を日記文学へ高めたと言えよう。

そして、前述したように、公的な立場ではなかったった当時の女性の心情を語るに最適な仮名の普及という「時」が女流日記文学を開花させたのである。

（２）女流日記文学の文学意識

日記における文学意識を考えるとき、日記と私歌集、物語との関係をなおざりには出来ない。私歌集は和歌を中心にしている点で、文学である事は言うまでもない。

私歌集には自撰のものと他撰のものがあり、さらに編集としては類集的なものや、雑集的なものの外に、時間の推移を考慮に入れたものなどもあり、これらが混じているものもあって、その様態は多岐にわたっている。こうした多様な私歌集の中で、時間的編集による自撰私歌集が日記と極めて近似した同質のものである。特に、豊富な詞書を持った場合には、私歌集と日記の区別はつけがたい。

「蜻蛉日記」、「紫式部日記」、「更級日記」などには部分的に私歌集的なところもある。私歌集と日記がほとんど差異がないものであるから、重点のおき方がどの程度和歌にあるかどうかで決まると見てよい。具体的に言えば、自己中心の和歌を書けば私歌集、自己の事を時間の経過の中に書けば日記であると見ればよいだろう。

物語について、女流日記文学の作者たちは深い関心を持っていた。

airiti

道綱母は「蜻蛉日記」の冒頭部分で、世間に多い古物語の一端などを見ると、たいそうたくさんの絵空事まで語られていると言って、現実遊離の物語への見解を示しているが、一方では物語の真実性をも認めている。

紫式部は「紫式部日記」の身辺の人たちの事を「物語にほめたるをとこの心ちし侍りしか」、「物語の女の心ちもし給へるかな」などと言っているところがあり、中宮の物語草子づくりに手をかし、自宅には虫の巣になっている大量の物語を蔵し、自作の物語を局におき、物語について人とも語り、物語への関心は並々ならぬものがあった。それに彼女はかの有名な「源氏物語」の作者でもあった。

孝標女も同じように「更級日記」の中でしばしば物語に言及している。特に、冒頭に見られる「その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまなれど・・・」、あるいは自分の現実逃避の様子を「物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて・・・」など、「源氏物語」への執念は異常なまでであった。

一方、「和泉式部日記」自体も「和泉式部物語」とも言われている。

日記と物語を比較してみると、日記は作者自身の過去の体得や知得の中から、執筆時点で忘れ難い事などを時間的な経過に沿って書いた回想の記であり、積極的ではないかも知れないが、ある程度読者を予想して書いているものである。物語は作者の体験が加味されるとしても、それは陰のものであって、題材は作者の創作意図にかなうように自由に料理され、時間的叙述にのせて読者に訴えかけようとするものと言えよう。

時間的経過による叙述のみを見れば、日記と物語は同じであるが、テーマの捕らえ方は全く異なっており、読者への態度は同様ではない。

日記と物語との二つの名称を持っている作品は、日記と同様に特定の個人に関する題材でありながら、執筆者が本当にその当事者かどうか不明である。二重名称になった原因はここにある。

いずれにしても、このようにして日記が物語や私歌集と並び称される事は日記の文学性を物語る事であろう。

（３）女流日記文学の時間

女流日記文学の日記は日記とは言っても日次のものではなく、時間の経過に従った記述になってはいるが、暦年月日の形式にこだわるものではない。時間的に極めて恣意的であって、その記載は執筆時点の必要をみたすだけのものであった。

airiti

長い年月の記述ではあっても、記事の粗細が著しく、数年間もの記事が欠けていたり、反対に日次やそれに近い場合もある。

執筆の場が記事の場とは必ずしも近接しているとは限らない上に、記事の時が過去になってからの記述だからである。毎日記すいわゆる「日記」とはなっていない。

たとえば、「蜻蛉日記」や「更級日記」の執筆時期は作者の晩年である。作者のこれからの人生は、これまでの体験によって既に方向づけられ、坂道を下るばかりである。もはや生涯は決まったという「時」に執筆された作品である。

言葉を換えると、その晩年という「時」から自分の若い時代、盛りの時代を回想し、哀惜の念を持って記されているのが特色である。

では、晩年に我が身を置いた時点で書くという事はどのような意義があるのだろうか。

酒樽の中に仕込んだブランデーが暗い酒蔵の中で何十年も熟成されて取り出されたとき、熟成されたブランデーはもはや仕込んだときの原料とは全く異なるまろやかなものになっている。

晩年に書かれた日記は正にこのようなもので、体験した事実は作者の心の中でじっくりと熟成されて、時にはまろやかな味になり、時には甘い香りを漂わせて、読者に訴えかけるのである。したがって、この「時」は大変重要な意義を持つものである。

そうしたものが単なる日次の日記とは異なる文学的香りを持った作品に仕上げていると言えよう。

「紫式部日記」の場合でも作者の盛りを過ぎた年代での執筆という事が、この作品の性格を決定づける基調となっている事は明らかであろう。

女流日記文学の世界形成は、それを書き進める作者の現在にあって回想される時間を紡ぐ作業にある。その回想される過去の中で現在を生きる作者の経験は、どこまでも作品の中のそれである。作者はその人生の経験からの要請として、その人生とは別に自分が生きる世界、日記文学作品を創造した事になるのである。

（４）女流文学の事実と虚構

秋山虔氏は、Ｇ・ショーの「文学とは何か」（注３）の文章を引用している。

「どんな場合でも、作家とその同じ人間との間にはつねに相違があるものなのである。（中略）作家が『人間として』の彼の生活の中に姿を現している時には、大抵の場合逆に『創造者として』の彼の生活の中から姿を消しているのである。もちろんこの逆の事も言える。しかし『人間として』の生活を存分に生きぬかないものに、どうして『創造者とし

て』の生活を存分に生きぬくことができよう。（中略）それにしてもどこで『人間』が終り、どこで『作家』が始まるのであろうか。この問いに対しては誰も確たる答えを与える事はできないだろう」。

この文章は、従来しばしば「人と作品」という題目で行なわれてきた作家の評伝的研究の作品論と伝記研究との無自覚無媒介な短絡的傾向に対する警戒の言葉として、読み味わうべきである。

日記文学と言われる作品においては、そこに形成される世界が作者の実人生の経験的事実に基づく事を原則とする以上、これに立ち向かおうとしたら、このような警戒が要請されるべきだと考えられる。日記文学の事実と虚構の問題を解く際に十分気を付けなければならない。何故ならば、日記文学はリアリズムとロマンティシズム、アイディアリズムの混じりあったものだからである。

夏目漱石の言葉では、「写実派の事を卑俗に藉りて文を担途に馳するは鏡裏に親交の姿を現じて、その親交なるが為に吾人をして眼を他に転ずるを欲せざらしむ」（注４）という一種の表現力なのである。例えば、道綱母が「蜻蛉日記」の中でどこまで自己に忠実な告白をなしえたかは疑問である。

また、秋山氏は「日記文学は根源的には虚構である。実人生に拠りつつも、その実人生からの要請として、そこに自己自身の転身する場を造営することにもなるのであるが、そのような場が、自立する論理を内蔵すればするほどに、そこに自身を有効に移転させうるのである」、「主題の展開に積極的に参与する技法というより、むしろ自己の裸身を敝う消極的な姿勢の場合が多くなる。作者の意地もあろうし、・・・」（注５）と述べる。

これは日記文学研究における難題であり、研究テーマの一つとして非常に奥深いものだと思う。筆者は次の研究テーマとしたいと考えている。

（５）女流日記文学の価値

ここでは日記文学の文学としての価値と歴史的存在価値に分けて考えたい。

女流日記文学の各作品を同一基準によってのみ評価する事には、疑問があると考えられるが、日記文学の文学としての価値は、作者の指向するものが読者にどのように文字を通して伝わるかという効果の問題に帰着する。日記文学の作者はそれぞれ自分の著作する意図について読者を予測しながら考えたはずである。そして、その意図するものが何らかの意味で読者に伝わる事を目的としていると考えられる。

人間が伝達の手段に用いる具体的なものは言葉であり文字である。文学の場合は、文字

化された言葉である。そして、作者の意図するところが、いかに効果的に文字化された言葉となって読者に伝達されるかというところに帰着すると言ってよい。

作者の意図するものが説得力を持って読者に伝達されるならば、それは優秀な作品として評価されうる。すなわち、日記文学の評価は、作者が体験し、それをもとにして創造した世界を説得力の備わった文章で、読者に伝達できるかどうかにかかっている。

日本文学史上の日記文学の価値は、平安時代の作品を高く評価しなければならない。

他の時代の日記文学は、平安時代ほど高く評価する事は極めて難しい。したがって、日記文学と言えば、平安時代の女流日記文学の代名詞になっているのは否めない。

しかしながら、この女流日記文学は他のジャンルのように決して主動的ではなく、どちらかと言えば受動的、あるいは消極的であり、その時代の文学の大勢をリードする力に欠けているのが特色である。

日記文学はその作品の背景にある時代環境と密着し、その時代の文学界の水面下を流れており、それが形となって水面上に現れたものである。底流として流れを動かしていると言うよりも、その底流の一現象を示す形で現われたと言った方がよいだろう。

しかし、その時代の文学に対して能動的であろうと受動的であろうと、優れたジャンルである事にかわりはない。

こうして日記文学の歴史的な動きは、その時代の文学の動きに並行しているものでありながら、あくまでもその実態は積極的に時代の文学界をリードし得ない性格のものとして存在しているのである。

日記文学の性格上、主流になり得ないからと言って、歴史的存在価値の見地から考慮してもその価値が左右されるものではあり得ない。それは日本の文学史上、燦然たる光芒を放ち続けているのである。

（注１）古記録総見　漢文日記と仮名日記　川口久雄（人物往来社）
（注２）女流日記文学講座　第一巻　秋山虔（勉誠社、平成３）
（注３）文学とは何か　Ｇ・ショー（斉藤正二訳、平凡社、昭３８）
（注４）文学論　第七章　写実法
（注５）王朝女流日記の詩と真実　秋山虔（国文学解釈と教材の研究、昭４４）

airiti

## むすび

梅棹忠夫氏の文を引用したい。

「日記は人に見せるものではなく、自分のために書くものだ。（中略）意味のある日記が書きつづけられるほどには『自分』というものは偉くないのが普通である。いろんな工夫を重ねて、『自分』をなだめすかしつつ、あるいははげましつつ、日記というものは書きつづけられるのである。『自分』というものは、時間とともにたちまち『他人』になってしまうものである。形式や技法を無視していたのでは、すぐ何のことかわからなくなってしまう。日記というものは、時間を異にした『自分』という『他人』との文通である」（注１）。

ここで言う「日記」とは、現代人のイメージとしての日記である事は言うまでもない。

しかし、この小論文で扱ってきた古代の日記は、もちろん「人に見せるものではなく、自分の為に書く」ものではなかった。逆に、人に見られて利用される事を期待するものである。原則として私生活よりも公的な事実の記録が主眼であり、私人としてではなく公人としての立場から書かれたものである。

平安時代の貴族女性は「女手」と言われるほど仮名が発達していく時代に恵まれ、後宮の才能に富んだ女房たちは「太后御記」、歌合日記のような盛儀としての公的な行事の記録から、盛儀の盛況ぶりとその場の雰囲気描写を主眼とする性格を具備した「女房日記」にたどり着いた。さらに時の流れにつれて、道綱母、和泉式部、紫式部などの人材が輩出する。それぞれの時代背景や環境が類似していたとは言っても、個々の体験は全く異なるものであり、その体験は日記の素材として格好のものであったから、作者たちはそれぞれ明確な意図を持って作品を書いた。したがって、どの作品もすこぶる個性的であった。

そして、平安時代の女流日記文学は百花斉放の様相を示し、いまでも日本文学史上揺るぎない存在感のある地位を占めているのである。

現代の言葉では「回顧録」と言う事になるだろうが、道綱母などの千年も前の女性の「回顧録」を読んでいると思うと、私は何と表現してよいかわからない気持ちに襲われるのである。その頃の女性の地位の低さ、家庭内での立場の弱さ、あるいは結婚形態における男性本位などは、女性の現実を厳しく追い詰めていた事であろう。彼女たちは閉塞状況の環境の中でどんなにもがいていた事だろう。その情景が見えるようである。

私は同じ女性の立場からそんな事を思い巡らすのである。

ウーマンリブと言われて久しい時代に生きる我々女性にとって、道綱母たちが味わった喜怒哀楽の感情は無縁だろうか。

その答えは我々個々人の心にあると思う。

airiti

平安時代の女性たちは、素晴らしい内の世界を我々に見せてくれた。文学の永遠の故郷がそこにある。私はいま、文学とは、そして人間とは、女性とはという永遠の疑問を自らの心に問いかけているのである。

（注１）続・知的生産の技術について　第４回　梅棹忠夫（昭４４年）

## 参考文献


日本文学新史　古代Ⅱ　（至文堂　鈴木一雄　昭６０）

和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記
（小学館　日本古典文学全集　１９９５）

特集　日記文学の系譜　（学燈社　国文学解釈と鑑賞　昭４４）

特集　王朝女流日記の詩と真実　（国文学解釈と教材研究　昭４４）

特集　女流日記文学への誘い　（至文堂　国文学解釈と鑑賞　１９９７）

女房日記の論理と構造　（笠間叢書　宮崎荘平）

論集　日記文学　（笠間書院　木村正中）

王朝女流文学の世界　（東京大学出版社　秋山虔）

平安朝文学史　（明治書院　秋山虔　昭４０）

土佐日記・蜻蛉日記　（小学館　日本古典文学全集　１９９５）

紫式部日記全注釈　上・下巻　（角川書店　荻谷朴　昭４６）

蜻蛉日記・更級日記　（学燈文庫　犬養廉　１９９５）

女流日記文学講座　第一巻　（勉誠社　今井卓爾　平成３）